

江戸前勉強会 2021 まとめ（案）

概要：2021年10-12月、より包括的な東京湾再生にかかわる人々の連携の強化、事業実施の支援を目指して、有志による参加型の勉強会を6回開催いたしました。勉強会では、話題提供が行われ東京湾についての知識を深めるとともに、これからの東京湾再生に向けた視点や目的、関係者の参画、影響伝搬、具体のアクションについてワークショップ形式で話し合いました。その結果、「めざすべき東京湾の姿の描写」に基づく行動、そのための「情報の共有」のための仕組みづくり、そして「東京湾の新たな課題への対応」のための話し合いの場が必要であるという結論を得ました。参加者は、継続しての勉強会の開催、話し合いの場の設置を希望しています。

勉強会の目標と実施方針：新たな東京湾再生のための行動計画（第3期）を念頭に、東京湾の再生の目標を定め行動につなげるために、大きな再生目標（ビジョン）を再確認し、必要な行動を具体化すること、特に、行動する主体となる、幅広い関係者（ステークホルダー）のネットワークの強化を図ることを目標に勉強会を実施しました。その中で、発表・発言については、個人の立場で行い、所属機関の見解としないこと、勉強会の成果を他で引用する場合には、発表者が特定されない形とすること（チャタムハウス・ルール）を適用し、楽しく、未来の東京湾のために議論するという原則で実施しました。

開催日時：2021年10月7日、10月21日、11月4日、11月18日、12月9日、12月16日の6回、各回17:30から19:00の90分

参加者：事前登録者71名（2021年12月16日時点）、延べ参加者193名（各回30名前後）、YouTube視聴回数（155回）

共催：東京湾再生官民連携フォーラム（モニタリングPT、窓PT、江戸前PT、生き物の生息場づくりPT他）、東京湾の環境をよくするために行動する会、東京海洋大学江戸前ESD協議会、東邦大学東京湾生態系研究センター、ベルモントフォーラムCOAST Cardプロジェクト

協力：東京湾再生推進会議モニタリング分科会、東京湾研究会

話題提供：

1. 「東京湾再生のための行動計画（第2期）の進捗とネットワークづくり」

東京湾再生推進会議モニタリング分科会担当者である中村さんから、「東京湾再生のための行動計画」について内容と振り返りについてご紹介いただきました。行政における問題意識はあるものの、取り組むことの難しさなどが説明されました。

2. 「東京湾のプランクトンから始まる海の生産」

東京海洋大学の片野さんから、東京湾の植物プランクトン相の変化と、どの栄養塩が東京湾の植物プランクトンを制限するかについてお話しいただきました。珪藻や渦鞭毛藻の変化、東京湾では今までリンが不足していると考えられてきたものの、窒素が足りないこともあるということがわかってきたことが紹介されました。

3. 「漁業を通してみる生産の場としての東京湾」

東京湾研究会の児玉さんから、東京湾の魚種別漁獲量や、漁業者の減少、東京湾の漁業における環境問題など、東京湾における漁業の変遷について主にお話ししていただきました。貧栄養や食害などによる水産物・生物の減少、江戸時代の海の様子（江戸前）などについての意見交換もありました。

4. 「東京湾の再生に向けて行政の取り組み、市民の活動」

海辺つくり研究会の古川から、東京湾の再生に向けてどのような関係者がいるのか、行政としての取り組み、市民の取り組みが紹介され、現在、様々な主体が参加できる基盤が出来上がってきたと説明されました。

5. 「生き物から見る東京湾のネットワーク」

東邦大学東京湾生態系研究センターの風呂田さんから、生態系ネットワーク、ヤドカリ・カニ類の調査、生物調査への市民参加についてお話しいただきました。埋立て等による干潟の消失、残された汽水域での生き物調査などが紹介され、人々のネットワークづくりも視野に入れた生態系ネットワークの充実の必要性が指摘されました。

6. 「市民参加を考えると・・・」

東京海洋大学の川辺さんから、市民参加の意味と意義、進め方についてのお話があり、本勉強会で言及される市民参加とは、沿岸域の管理に対する参加であり、行政と市民が議論し、協働するといった段階の取組として考えられると説明されました。

ワークショップテーマ（内容は後述）：

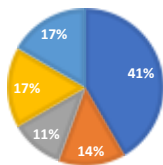
1. 東京湾の現状認識と期待
2. 東京湾再生の目的とプロジェクト「保全と開発のバランス」を保つために
3. 関係者と参加の機会創出のために（だれが、なにを）？
4. 東京湾について知っておくべきこと（活動、環境、生物、地形・歴史）
5. 東京湾再生のためのつながりの発見！（具体のアクションプラン：前半）
6. 東京湾再生のためのつながりの発見！（具体のアクションプラン：後半）

ワークショップのまとめ

東京湾の現状認識と期待

第1回の勉強会で参加者から東京湾の現在のイメージ、望ましい東京湾のあり方についてアンケートしたところ、以下の5つのポイントが示されました。

東京湾に対する現状認識と期待

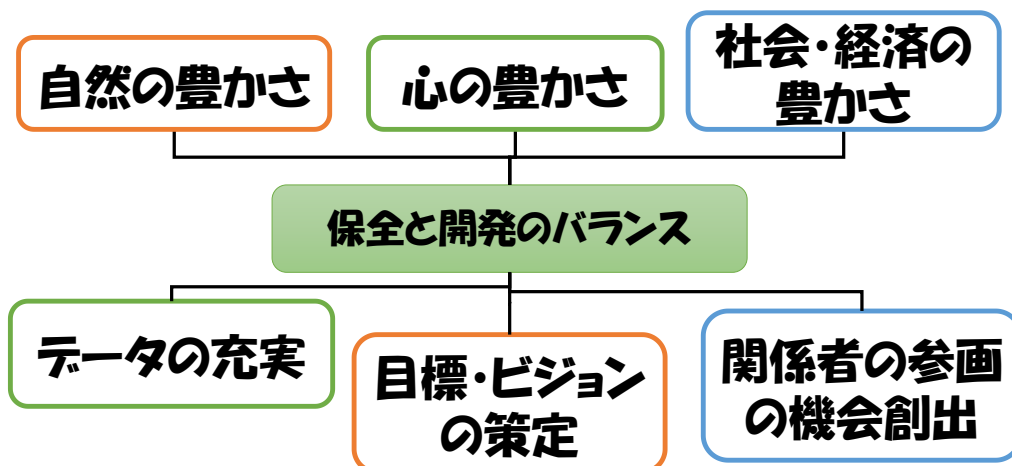


- 水辺へのアクセス
 - 水遊びができ、親しめる、自由で安全な海
- 保全と開発のバランス
 - 産業（漁業、鉱工業、観光業、）
 - 環境（生物多様性、CO2）
 - 横断的組織・計画、防災と環境
- 具体的問題の解決
 - 夜景の罪悪感、下水道臭、不法投棄、密漁
- 連携の推進
 - 川と海、地域の住民、学校との連携
- 漁業・食文化
 - 食料調達、地産地消、環境学習

望ましい東京湾に対する5つのポイント（左は回答数の割合）

東京湾再生のビジョンと目指すところ

第2回の勉強会では「保全と開発のバランス」を例にとり、その目的・原因の解析を行いました。その結果、「保全と開発のバランス」をとっていくことは、自然、心、社会・経済の豊かさを実現することが目的であり、そのための手段として、目標・ビジョンの策定、データの充実、関係者参画の機会創出が必要であることが抽出されました。

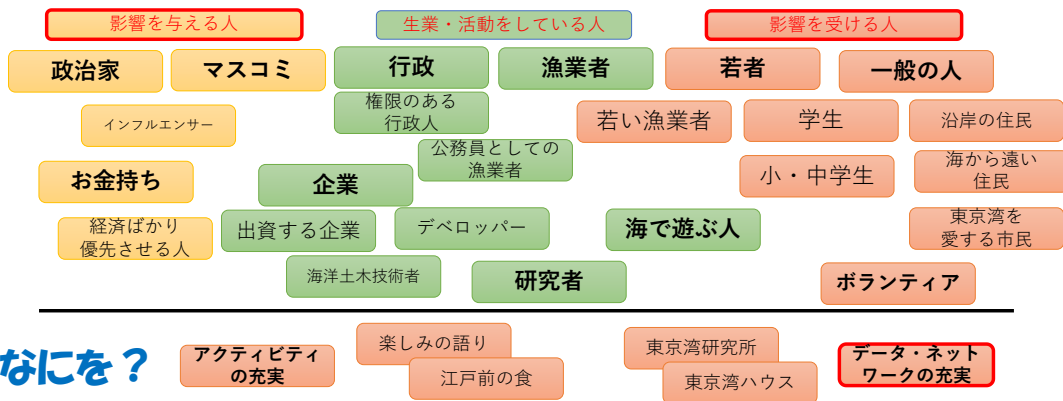


保全と開発のバランスをとることにより達成される目標と、そのための手段

東京湾再生に関わる人々：

第3回の勉強会では、東京湾再生に対して「誰が」関与すべきかについて意見を出し、影響を与える側の人（利益を得る側の人）、例えば、政治家とかマスコミとか、インフルエンサーとか、お金持ち等があげられました。その対極には、影響を受ける人がいて、前者がベネフィット受ける人だとすると後者は、リスクを被る人とも言え、?業・活動している人たちとともに、きちんと含まれることが大切だと言うことが指摘されました。

だれが？



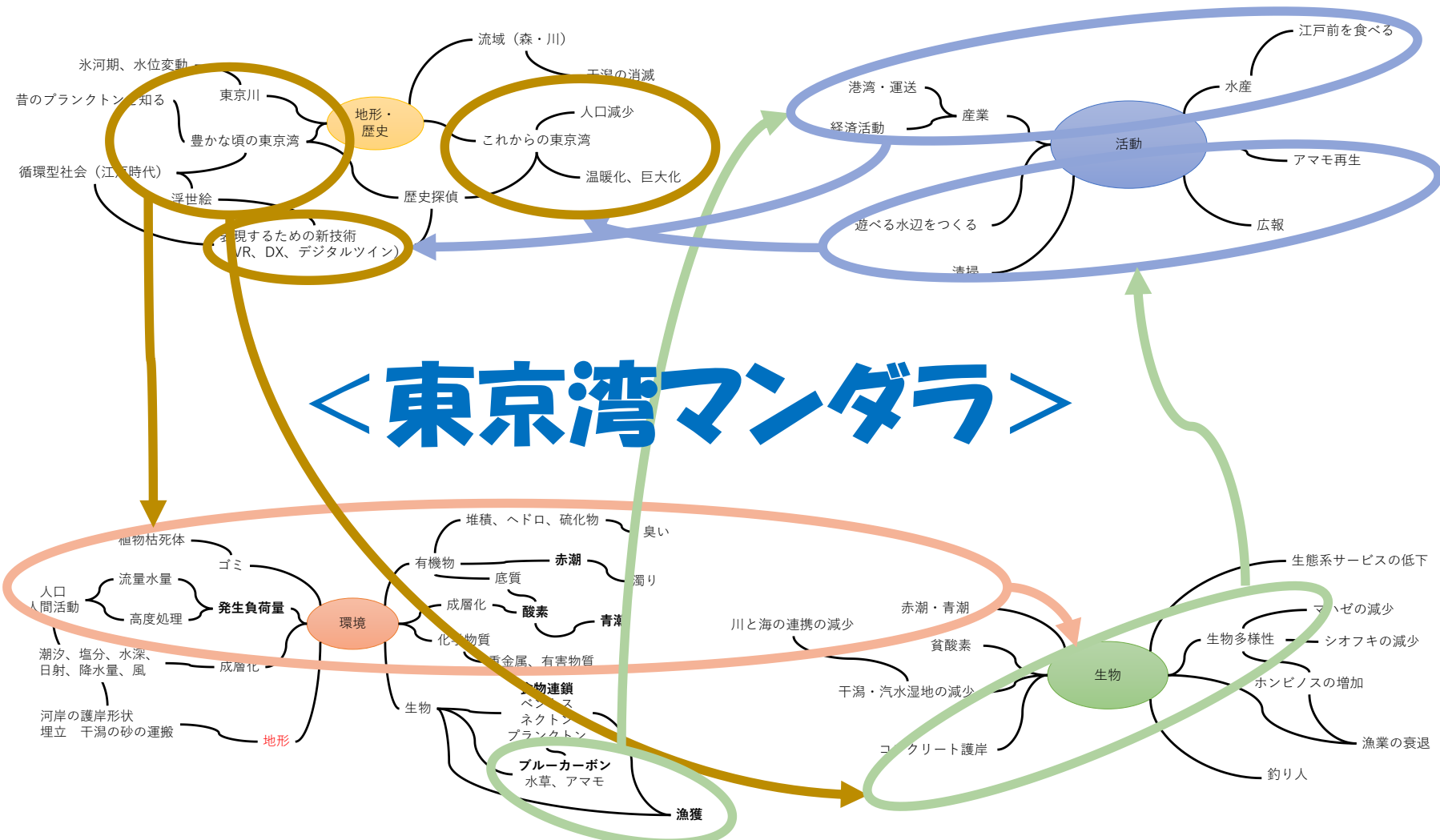
東京湾再生に向けて「誰が」「何を」すべきであるか

議論されたアクションプラン：

第4回の勉強会では、東京湾再生において「知っておく必要があること」を環境、生物、活動、地形・歴史の4グループに分かれて検討しました。その結果は、東京湾マンダラとして整理され、文章で表すと以下のようになりました。

東京湾マンダラ

氷河期からの水位変動を受け出現した東京湾は、流域からの土砂流入を受けて豊かであり、循環型社会が構築されていたことが、浮世絵などによってもその様子がうかがい知れる。その後、人口の増加、埋立、負荷の増加などを受け、環境が悪化し、臭い、赤潮、貧酸素、青潮、化学物質などの問題が生じた。それらは、懸命の努力により改善されつつあるが、干潟・汽水湿地の減少などによる生物への影響は残り、川と海の連携が失われ、その影響は生物に表れ、漁業活動や釣り人などにも及んでいるように見える。持続可能な経済活動を推進するとともに、皆が安心・安全に遊べる水辺を作り出すことによって、アマモが広がる海を取り戻し、江戸前を食べられる。これから問題となる人口減少や地球温暖化、災害の激甚化の中で、開発と保全のバランスのとれた東京湾を作り出し、その恵みを皆で共有していくことが大切である。



<東京湾マンダラ>

東京湾再生の背景となるつながり (東京湾マンダラ)

議論されたアクションプラン：

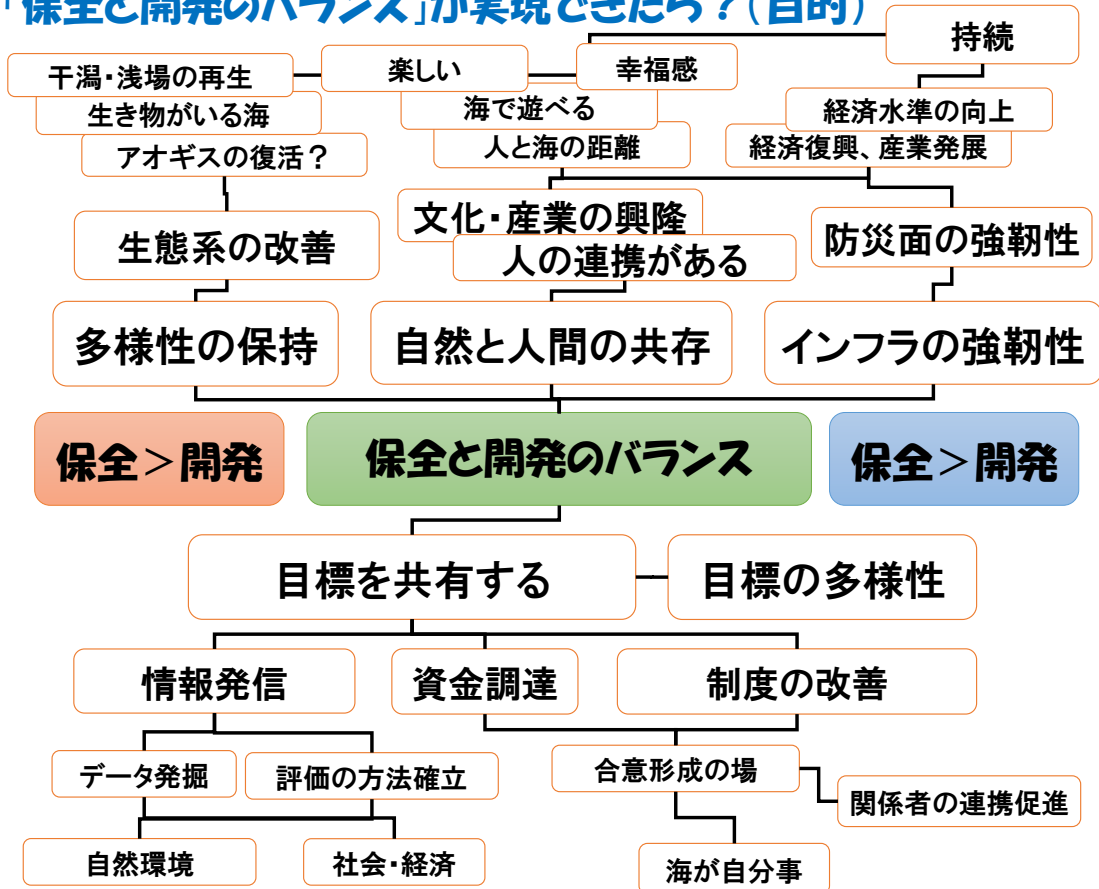
第5回、第6回の勉強会では、小グループに分かれて、具体のアクションプランについての議論を行いました。その結果を発表し、相互に意見交換した結果として、3つのグループ（目指すべき東京湾の姿、生物データの一元化・体系化、対話の場の形成）に分類されるアクションが提案されました。これは、第2回の勉強会で議論された3つの手段に対応するものでもあります。

1. **目指すべき東京湾の姿を描こう。** 目指すべきは水質のきれいさと、生物の豊かさであろうが、社会全体としての海の幸との向き合いかたも含めて考えるべき。「江戸前の海」を目指すべきキーワードとして、それに対応する水質や指標を考えていくべき。
2. 例えば、きれいな海、豊かな生態系を取り戻すために、東京湾全体で**ヘドロのない海を目指す**。それで実現できるビジョンを明確にし、分流式下水道の導入など、利用可能な技術を活用し、行政が中心になり現状把握から始めよう。ヘドロはカーボンの貯留庫でもあり、リン資源でもある。
3. 例えば、遊べるような浜をつくり、**海辺へのアクセスを確保しよう**。そのためには、アクセスしたい人（させたい人）とそれを阻害する人（協力してほしい人）を巻き込んで、海辺でできる遊びを再確認し、エコリゾート（テーマパーク）として地域の人が協力し、みんなの原体験をつくれるような場としよう。
4. **東京湾の生物データの一元化・体系的な取得をしよう**。生物データについては、データの重要性への認識が低いということや、地域的な偏りも大きいことが問題であり、その啓発（ロビー活動も含め）が重要である。
5. 例えば、釣りなどを活用して「**うなぎ**」の調査やシンポジウムを開催しよう。様々な方々の参加を進めるために、専門家が指導しながら一般の人、子供たちが参加できるような取り組みとして、行政とも連携しながら進めと良い。写真を使ったデータベースなども面白そう。
6. **新しい課題に対する対話の場をつくろう**。共通であった東京湾の環境の目指すべき方向が多様化してきており、最適解が異なる人々が居られる。漁業者の方々も含め、多くの人々が参加できるような、新しい仕組み・技術を活用した場をつくるのが大切。
7. 例えば、海の仕事の魅力を伝え、様々な業種をゆるくつなぐ「**海のイドバタ会議**」を実施しよう。イドバタ会議本番は4月以降に控えている、江戸前勉強会のスピンオフとして、1-3月から開催できるよう要望する。
8. 例えば、その第一歩として、継続してコミュニケーションできるような場を作っていこう。自然の声を聞きながら、リアルにもつながれるグループをつくって、**継続して話していこう**。

以上

江戸前勉強会2021 第2回のふりかえり

「保全と開発のバランス」が実現できたら？(目的)

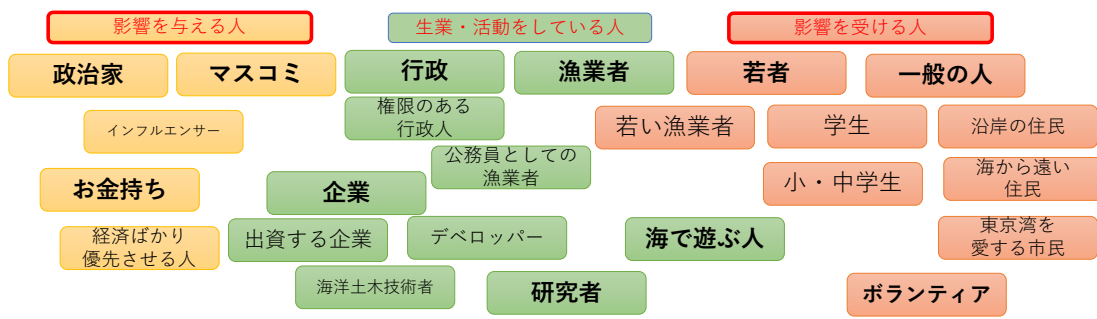


「保全と開発のバランス」を実現するためには？(手段)

江戸前勉強会2021 第3回のふりかえり

関係者と参加の機会創出のために(だれが、なにを)!

だれが？



なにを？



江戸前勉強会2021 第5回のふりかえり

東京湾の再生のためのつながいの発見！

No.	Room #	何を	誰が	困難	知恵・方法
1	1	うなぎで環境再生	自治体（行政）	市民関心の低下、特別採捕許可	江戸前うなぎシンポ、江戸前うなぎ一斉調査
2	1	生物一斉調査	専門家（博物館など）		
3	2	目指すべき東京湾の姿の描写		目標が定まらない	
4	2	合流式の問題解決・分流式の検討	役所	費用	合流式のままだパイプラインもあり？
5	2	上流と沿岸の関係構築			
6	3	情報の共有	持つ人、わかる人、地方公共団体（環境部局、研究所）、国	地域による情報の偏り、養老川、底質のヘドロ、底生生物に高濃度で検出	
7	3	2016年のアサリ減少の継続した結果の共有	研究者	生物調査の結果がまとまっていない、行政のとりまとめやくない（法律や規制に基づいていない）	
8	4	東京湾が抱える新しい課題への取り組み（貧栄養、高水温化、マイクロプラスチック）	一人ひとり		話し合う場、行政と市民だけでなく、漁業者と市民の新しい対話が必要
9	4	生物に表れている変化の認識			話し合う場、行政と市民だけでなく、漁業者と市民の新しい対話が必要
10	5	漁業者のつながり	若者	モチベーション、環境・状況の変化に対する適応、情報は逆効果も	
11	5	一般の方が漁業者の話聞く場をつくる			
12	5	点在する東京湾関連施設（島、歴史施設なども含め）をつないだ情報発信	運営主体の自治体	行政官のつながりが弱い	
13	6	おかずの釣れる釣り施設をつくる	行政	お金がない	
14	6	ヘドロのない海をつくる	企業、個人、民間団体	ヘドロの活用、廃棄方法、悪臭	ヘドロの知識、利活用価値創出
15	6	海のアミューズメント（TDLのような）創出	大手企業	チームの形成	地域貢献として、民間へのマーケティング
16	6	ヘドロ処理施設としての保護区域創設	行政、企業、研究者	チームの形成、財源の確保	タイでの実例がある
17	7	潮干狩りができる場づくり	みんな、場を管理する人、利用する人、若い人、保育園仲間	活動の制約、アサリが育たない、日常で通えない、入浜権のあり方	駐車場料金のようなシステムで集金、みんなで行く
18	7	行けば遊びが満ちてくるような砂浜	みんな、場を管理する人、利用する人、若い人、保育園仲間	活動の制約、アサリが育たない、日常で通えない	駐車場料金のようなシステムで集金、みんなで行く

江戸前勉強会2021 第6回のふりかえり

東京湾の再生のためのつながいの発見！

